

分野（３）

ぜん息発症予防・健康回復のための知識の体系化に関する調査研究

③COPD患者の機能回復に関する調査研究

研 究 課 題 名： COPD患者の在宅生活における機能回復に関する調査研究

調査研究代表者氏名： 木 田 厚 瑞

評価コメント

○在宅時の患者対応についての課題がかなり明らかになった点を評価する。

○Action Planを今後発展させることを期待する。

○高齢者と子どもの同居率の経時推移の国際間比較の図は初めて見るもので大変興味深い。1990年までのデータなので日本では同居率がまだかなり高いが、現在、特に大都市では、これよりずっと低くなって欧米に近づいているのではないかと思う。この図が現在の日本の医療が抱える問題を如実にあらわしていると思う。

○大都市では一人で生活している高齢者が非常に多い。しかもCOPDといわずいろいろな故障を抱えて、自由に動くことのできない人が非常に多い。したがって、COPDのアクションプランを作るのは結構なことであるが、第一に高齢者がそれを理解できるか否かが問題になる。第二に、仮に理解できたとしてもそれを実行に移すのに自力では不可能で、第三者の助けを必要とする場合が非常に多い。現在、誰がこれを負担しているのかといえば、介護保険によるケアマネージャーやヘルパーである。しかも、限られた時間しかない。したがって、アクションプランを患者に示すだけでなく、これらの人達にも十分理解させて協力を得る必要がある。社会的な構造の変化が根底にあり、厄介な問題ではあるが、重要なことなので、この辺りの検討も是非やってほしい。また、医師がCOPDの患者について、これらのコメディカルの人たちに指示を出すための項目を書いたパンフレットのようなものを作製すれば、多くの医師は非常に助かり、患者にとってもメリットは大きい。○

○ほぼ所期の目的と目標は達成されたと思う。地域医療連携というが、どのような連携を構想しているのか示してほしい。

○COPDの患者に対してアクションプランを作成して、早期対応の仕方、運動療法などについて患者教育の資料とすることは社会的には十分意義のあることである。ただ、COPDの病状が深刻になってくるのは高齢になってからである。この高齢層は教育しても理解することも種々の理由から実行することも困難なことが多い。患者教育と同時に、これらの患者を日ごろから支援しているケアマネージャー、ヘルパーなども教育することが大切である。

○COPDの増悪を回避しつつ、身体機能の維持、回復を図るシステムを構築することを実践しており、評価できる。今年度はまだ評価するまでには至っていないので今後の研究が必要である。また、評価法の一つの手法として、一ノ瀬班と協力することも必要であると思われる。